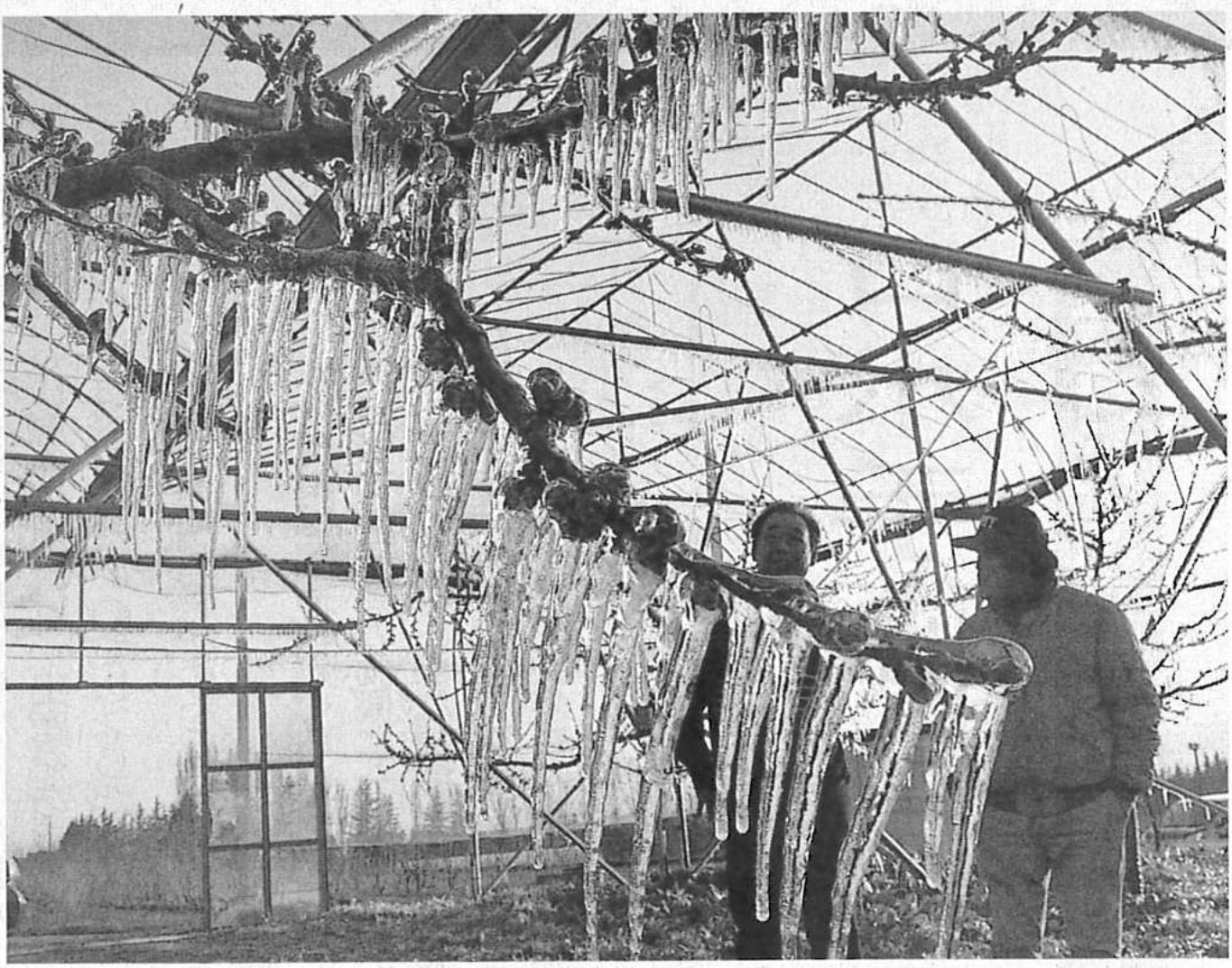

長く伸びたつららが朝日に照らされて輝いていた＝山辺町

サクランボ守る 春の寒

冷え込みが強まった12日朝、霜害対策で散水された山辺町のサクランボ園は、氷と長いつららに覆われ、真冬を思わせるような光景になった。

山辺町の多田農園では気温の低下を予想し、前日午後11時ごろから高さ3.5㍍に設置したスプリンクラーによる散水を始めた。樹木の表面に氷ができる際の凝固熱を利用して、花芽の中のめしべが凍って枯れてしまうことを防ぐ散水氷結法と呼ばれる手法。周囲が明るくなった午前6時前には、花芽や枝から伸びたつららが長さ約20㌢にもなり、農園を訪れた近くの男性は「まるで映画『アナと雪の女王』みたい」。

この日朝の山形地方気象台の最低気温は0.1度。経営者の多田耕太郎さん(61)によると、低温と無風の条件がそろわないと、ここまでつららは伸びないという。多田さんは「15日ごろには佐藤錦の開花が始まりそうだ。花芽は開花が近づくにつれて、霜に弱くなるので、対策に万全を期したい」と話していた。

(戸松康雄)